

日本側拠点機関名	名古屋大学
日本側コーディネーター所属・氏名	グリーンモビリティ連携研究センター・市野良一
研究交流課題名	ASEANにおけるコンパクトモビリティモデル研究拠点
相手国及び拠点機関名	チュラロンコン大学（タイ） ハノイ工科大学（ベトナム） ラオス国立大学（ラオス）

### 研究交流計画の目標・概要

**【研究交流目標】 交流期間（最長3年間）を通じての目標を記入してください。実施計画の基本となります。**

本事業では、本学の全学協定校であるチュラロンコン大学（タイ）、ハノイ工科大学（ベトナム）、ラオス国立大学（ラオス）と連携し、発展著しい東南アジアに適した、安心かつ快適に移動できる、新たなコンパクトモビリティモデルの研究拠点と学術基盤の形成を目的とする。グリーンモビリティ連携研究センター（以下「GREMO」という。）は、ナノ材料から燃料、通信・制御、インフラ等の幅広い技術分野の研究者を結集し、研究基盤ネットワークを構築しながら新たなイノベーションの創出を目指している。名古屋大学、チュラロンコン大学、ハノイ工科大学、ラオス国立大学が独自に有するモビリティ関連技術を融合し、東南アジアで重要性が増すことが予想されるコンパクトモビリティモデルの開発を目指す。GREMO が中心拠点となり、①連携研究体制の構築、②モビリティ研究の次世代を担う若手研究者の実践的育成、③モビリティ学の確立と革新的な研究課題の提案を目指し、セミナーや共同研究による研究者交流を軸とする3年間の研究交流を実施する。

タイやベトナム、ラオスが位置する東南アジア諸国（ASEAN）では、経済発展に伴う自動車の普及が著しいが、バイクは多くの人々のコンパクトモビリティモデルとして、依然として重要性は高い。しかしながら、交通量の増加と交通ルール等が厳守されないことに起因する無理な運転や ASEAN の気候、路面状況等に起因するバイクの交通事故が増加し、解決すべき課題となっている。それらのことから、家族と一緒に、安全かつ快適に移動できる ASEAN に適した新たなコンパクトモビリティモデルが必要となっている。昨今のモビリティの成立要件として「安全」、「安価」、「快適」、「環境」がキーワードであり、新たなモデル開発には多くの研究者の参画が必要である。

本事業では、ASEAN で活用できるコンパクトモビリティモデルの開発を目指し、ASEAN の研究者と現地のニーズの抽出によるモデルの最適化や必要な要素技術の検討、シーズ技術とのマッチングの探索による連携研究を実施する。コンパクトモビリティ普及のためのインフラや法制度に関する研究も含め、相手国拠点機関 3 大学と共同で実施し、ASEAN における新たなコンパクトモビリティモデルの構築を目指す。

**【研究交流計画の概要】 ①共同研究、②セミナー、③研究者交流を軸とし、研究交流計画の概要を記入してください。**

事業内容の枠組み、共同研究の推進方法、セミナー計画等の意思決定の場として、4 大学のコーディネーターと協力研究者による連携研究組織運営委員会を設置する。運営委員会の強いリーダーシップの下、以下に示す研究交流計画を実施する。

#### ① 共同研究

既存の共同研究グループに新たなグループの参加を促し、それぞれの研究シーズやニーズを共有することにより、新たな共同研究グループの構築を目指す。企業研究者（経験者を含む）から助言をもらいながら共同研究を加速させ、若手研究者等の交換留学によって、ASEAN におけるコンパクトモビリティモデル開発に向けた共同研究を推進する。（2 か月程度、各国 2 名程度）

#### ② セミナー

- 1 年目：各国のシニア研究者による「運転制御」「材料・エネルギー」「インフラ・交通計画」をキーワードとしたセミナーを実施し、必要な技術に関して、幅広い知見を得る。（2 月タイ）
- 2 年目：各国のモビリティの課題やニーズについて、若手研究者が主体となって議論を行い、企業研究者（経験者含む）の講義を通じて、思い描いたコンパクトモビリティの姿を具象化するために必要な技術を抽出し、コンセプトを含めたモデルイメージを提案する。（8 月ベトナム、2 月ラオス）
- 3 年目：必要な要素技術の研究経過に関する報告と交換留学による研究成果の発表を行う。（9 月タイ、2 月日本）

#### ③ 研究者交流

各国の若手研究者や博士後期課程学生の派遣・受入を通じて、若手研究者のみの議論の場を設け、交流の活性化を図る。また、国際シンポジウムにおいて世界各国の研究者と交流を深め、研究ネットワークの拡充を図る。

[実施体制概念図] 本事業による経費支給期間（最長3年間）終了時までには構築する国際研究協力ネットワークの概念図を描いてください。

## ASEANにおけるコンパクトモビリティモデル研究拠点



チュラロンコン大学  
SRIPAKAGORN, Angkee  
スマートモビリティリサーチセンター長  
(自動車工学)

～4か国間の連携を促進する意思決定の場～  
**連携研究組織運営委員会**

ハノイ工科大学  
LE ANH Tuan  
交通工学部長  
(燃焼効率)

ラオス国立大学  
BOUNPHANMY, Somchanh  
理学部長  
(バイオ燃料)



本事業（2期6年）による  
名古屋大学を中心としたモビリティ国際連携研究拠点の構築

ASEANに適した、安全かつ快適に移動できるモビリティモデルの開発を目指す